書写教育に対する私のあゆみ

（１）中学校教員時代

私は書道の専門的な大学である大東文化大学を卒業し、中学校の国語科教諭として、広島県に採用された。中学校でも得意の書写授業を中心に指導を行っていたが、生徒達から「自分の文字が嫌い」「書写の授業が嫌い」「字を書くことがいや」という声をよく聞いた。小学校において人生で初めて「書写」に接したときによい出会いをしていないのではないか、それで文字に関して劣等感を持っているのではと感じた。

子どもたちに書写と良い出会いをさせてやりたいという思いが強くなり、小学校への異動を考えるようになった。しかし、小学校教員の免許を持っていなかったため、仏教大学の通信課程に学び、免許取得後９年間の中学校教員生活を最後に小学校に異動した。

（２）小学校教員としての出発

小学校教員となると同時に市書写部会の部長に就任し、市内の書写教育を変えようと部長自ら授業者として数年連続して（立候補して）研究授業を行った。しかし、そこには自分は書写の指導力が高いという奢りがあった。私は子どもの前で毛筆を使って何度も書いて見せ、瞬時に個別指導を行い、欠点を指摘して修正することで子どもたちの字を完成させる授業を繰り返していた。ある研究授業後の協議会の場で「素晴らしい授業ですね。これは藤井先生しかできない授業です。」と言われた時さえ誉め言葉と勘違いをしてしまった。その後「私しかできない役に立たない授業」であるということに気づき、他の教員にアドバイスのできない自分がいることに気がついた。

書写部会の部長として、他の教員を牽引するつもりが、実際には誰もついてきてはいなかった。自分は書写ではなく書道の指導法を教室に持ち込み、自分の技術と勘に頼った授業をしていたことに気づき、恥ずかしさでいっぱいになった。

書写教育法を学び直すために、書写部会の部長として今度こそリーダーシップが取れる知識と実践力を得るため、安田女子大学大学院に進学して研究を進めることにした。

（３）大学院での出会い

大学院で当時の小中高等学校の書写書道の学習指導要領を作り、全国大学書写書道教育学会を創設した久米公先生の特別講義をお聴きする機会を得、永年小学校の書写教科書の編集に携わっていた安田壮先生との出会いから、私の書写教育のあり方が一変した。

手本を学ばせるのではなく、手本から気づく、発見する、生活に応用する。今までの私の考えが根底から覆され、多くの示唆をいただくことができた。久米先生、安田先生との出会いが現在の私の授業の基底となっている。

（４）土堂小学校時代

土堂小学校に転勤して２年目に校長公募で陰山英男先生が赴任され教えをいただく幸運に恵まれた。陰山校長からは、「スピード・テンポ・タイミングを大切にした授業の作り方」を学ぶことができた。私の授業が更に変化していくのを感じた。

（５）私のライフワークとして

書写は、教師の間では、持ち時間の調整教科になっていたり、軽んじられ、敬遠されたりしている教科である。しかし、本当は子どもたちを１時間で成長させることのできる唯一の教科である。書写の楽しさ、素晴らしさを伝えることが私のライフワークとして捉えて日々実践と研究を進めている。